

パラグアイ共和国における魚食文化の受容
-1980年代以降のティラピア養殖を事例として-

The cultural acceptance of fish consumption in the republic of Paraguay:
A case study of Tilapia aquaculture farming since the 1980s

指導教員 藤掛洋子教授

横浜国立大学 都市イノベーション学府 都市地域社会専攻 23RB118 鳥越温生

【研究背景】

今日、世界において魚の消費量と水産養殖量は増加傾向にある [FAO 2024]。肉食文化が根付くといわれているパラグアイにおいても水産養殖量は増加傾向を示している [FAO 2024]。また、2022 年度に筆者が行った調査では、パラグアイにおける水産養殖に対し、アスンシオン国立大学（以下：UNA）が 1980 年代以降、何らかの働きかけを行なっている可能性があることを明らかにした [鳥越 2023]。

【研究目的】

本研究では、1980 年代以降の水産養殖に対し、UNA はどのような働きかけを行ったのか、また、首都アスンシオンでは魚食文化が広がっているのか否かを明らかにする。

この 2 点を明らかにし、パラグアイにおける魚食文化が 1980 年代以降、どのように人々に受け入れられてきているのかを分析・考察する。本研究では、前川 [2000] の翻訳的適応と戦略的適応の理論を用いる。

【研究方法】

研究方法は、パラグアイにおけるフィールドワークとインタビュー調査、文献調査、参与観察、アンケート調査、国内でのオンライン調査、SNS の調査である。

【研究結果と分析・考察】

1960 年代に農牧省は、米国発のワールド・

ネイバース・プログラムを通してティラピア生産を奨励した。その後、UNA が 1980 年代から養殖に対するカリキュラムを整えはじめた。1990 年代、UNA は、水産養殖に対し、戦略的適応の中に翻訳的適応の要素が含まれる入れ子の構造のプログラムを用意していた。アスンシオン市内の参与観察では、肉を用いることの多いメニューや伝統料理に魚が使用される事象が見受けられた。

パラグアイの都市部では戦略的適応と翻訳的適応が相互に作用しながら食文化の変容が起きており、食文化としての魚食文化が生まれようとしていると結論づけた。

【研究の課題と可能性】

首都アスンシオンから範囲を広げて、魚食文化を観察する必要がある。また、アスンシオン市民に話を聞き、家庭内での魚の消費についても詳しく調査する必要がある。

本研究で明らかにした文化接合のプロセスは、新たな食の国際支援の一助となり得ると考える。また、プラネタリー・ヘルス・ダイエットの実践が困難な国や地域においても水産養殖を通して、それらを実践できる可能性があるのではないかと考える。